

DR. THORNDYKE
The Complete Short Stories

R. Austin Freeman

ソーンダイク博士 短篇全集

全3巻

R・オースティン・フリーマン

瀬上瘦平 訳



国書刊行会



科学捜査と論理的推理で謎を解き明かす
“あらゆる時代を通じて最高の法医学者探偵”
ソーンダイク博士の事件簿。

シリーズ中短篇全42作品を完全新訳、
初出誌の挿絵・図版を収載した決定版全集!

四六判変型・上製ジャケット装・本文500～570頁
平均予価3,500円+税 装幀=山田英春



第I巻 歌う骨

2020年9月刊 定価:本体3,600円+税
ISBN978-4-336-06674-9

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL.03-5970-7421 FAX.03-5970-7427
<https://www.kokusho.co.jp>

Modern Detective Storyの実験室

法月綸太郎

ソーンダイク博士を「シャーロック・ホームズのライヴァルたち」と呼ぶのは、半分正しくて半分間違っている。博士の産みの親であるフリーマンは、名探偵のカリスマ性に依存しない、公正なプロセスとロジック重視の謎解き小説を確立した黄金時代の立役者なのだから。

恥ずかしながらかく申す私も、科学者探偵／倒叙ミステリの創始者という決まり文句に引きずられ、ずっと地味で退屈な感想しか持ち合わせなかった。ソーンダイク作品の真価に気づいたのは2000年代後半、『証拠は眠る』『ポッターマック氏の失策』といったシリーズ後期の傑作長篇が紹介されてからだが、とどめを刺されたのは瀬上瘦平氏が新訳した『オシリスの眼』『キャッツ・アイ』にほかならない。緻密なプロットと水も漏らさぬ論証の迫力は、従来の骨董品のイメージを完全に塗り替えたのだ。

再評価が遅すぎたとは言まい。むしろ21世紀の翻訳で博士の活躍が読める幸運を喜ぶべきだ。アイデアの豊富さもさることながら、シリーズ後期の長篇を踏まえて前期の短篇群を味読すると、第1次大戦前デビューのフリーマンが黄金時代の探偵小説をリードし、生涯現役でいられた理由がはっきりわかる。倒叙形式という試みを通じて、フリーマンは「犯人の論理」と「探偵の論理」を複眼的に処理する視点を手に入れた。解決の論理性とフェアプレイの急所をつかんだと言ってもいい。だからこの短篇全集は、文字通りの意味でModern Detective Storyの実験室なのである。

「あらゆる時代を通じて最も偉大な科学的探偵」

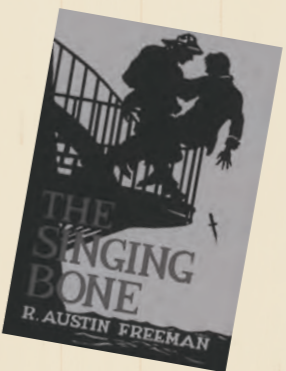
—— エラリー・クイーン（ソーンダイク博士評）

「このオースティン・フリーマンという人は素晴らしい作家です」

—— レイモンド・チャンドラー

I 歌う骨

科学捜査を駆使したソーンダイク博士の探偵譚は、『ピアン』誌に連載されるやたちまち人気を博し、シャーロック・ホームズ最大のライヴァルと目されるに至った。密室トリックで有名な「アルミニウムの短剣」など八篇を取めた記念すべき第一短編集『ジョン・ソーンダイクの事件記録』（一九〇九）と、「オスカー・ブロードスキー事件」をはじめ、犯人視点で語られた犯行が探偵によって解明される過程を描く「倒叙形式の発明で探偵小説史に不滅の輝きを放つ『歌う骨』（二二）の名短編集二冊を収録。



II 青いスカラベ

後に長篇に改稿された単行本未収録の中篇「ニュー・イン三十二番地」、倒叙物「死者の手」を巻頭に、短編集『大きな肖像画の謎』（一九一八）から「消えた金貨」など二篇、さらに作者のエジプト趣味も窺える宝探し暗号小説「青いスカラベ」、証拠に付着した埃の顕微鏡検査から強盗殺人犯を追及する科学者探偵の本領発揮「ユージー・スフィンクス」など、第2大戦後に再開されたシリーズ七篇をまとめた「ソーンダイク博士の事件簿」（二三）を収録。付録エッセー「探偵小説の技法」他。



III パズル・ロック

一九二〇年代の探偵小説「黄金時代」に入り、さらに円熟味を増したソーンダイク探偵譚。短編集『パズル・ロック』（一九二五）、『魔法の小箱』（二七）は、暗号、毒殺、アリバイ、バラバラ死体などの多彩なテーマを取り上げ、独創的なトリックやプロットの妙で読者を魅了する傑作が目白押し。「パズル・ロック」「バーナビー事件」「砂丘の謎」「ポンティンク氏のアリバイ」「パンドラの箱」ほか全十八篇を収録。付録エッセーはフリーマン研究者P・M・ストーンの「キングズ・ベンチ・ウオーク5A」。



ソーンダイク博士短篇シリーズの完全版

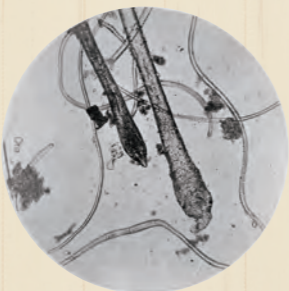
「あらゆる時代を通じて最も偉大な法医学者探偵」とされるソーンダイク博士は、一九〇七年に長篇『赤い拇指紋』でデビューしました。この長篇で手応えを感じたフリーマンは、当時の人気雑誌の一つ、『ピアン』誌にソーンダイク博士の短篇シリーズ八篇を売り込み、一九〇八年十二月号の「青いスパンコール」を皮切りに連載を開始しました。

中短篇を通じて知ることのできるソーンダイク博士は、シリーズ全体のほぼ前半の時期に限られるのですが、脂の乗った時期の傑作が集中していて、長篇以上にトリックの創意工夫が顕著であり、密室物の「アルミニウムの短剣」、暗号ミステリ「パズル・ロック」をはじめ、不可能犯罪、毒物、アリバイ、暗号など、謎解き推理小説における様々なジャンルの代表的傑作が目白押しとなっています。

科学的実証性を重んじたフリーマンは、作中のトリックや仕掛けの大半を自ら実験して実効性を確かめただけでなく、髪の毛や綿埃などの顕微鏡写真、足跡の石膏型などの証拠品の写真を多くの短篇に挿入しました。ところが、雑誌発表時に掲載されたこれらの写真の多くは、単行本には収録されませんでした。本全集では、『ピアン』誌掲載時の写真、図版、挿絵は原則としてすべて収録し、同誌以外の掲載作品については、可能な限り、他の初出誌や初期の刊行本から挿絵を収録する方針です。

この全集を通じて、英国探偵小説界の重鎮として古典期から黄金期にかけて活躍したフリーマン作品の魅力を知っていたかとともに、後世の作家たちに与えた巨大な影響の片鱗に触れていたことができれば幸いです。

瀏上瘦平



R・オースティン・フリーマン

(R. Austin Freeman, 1862-1943)

ロンドン生まれ。医師から作家に転身。一九〇七年、法医学者ソーンダイク博士を探偵役とした長篇『赤い拇指紋』を発表。翌年、『ピアン』誌に短篇シリーズを連載開始。科学捜査を駆使したソーンダイク探偵譚は人気を博し、また短編集『歌う骨』（一九二二）は倒叙推理の嚆矢となった。（ホームズのライヴァルたち）の時代から大戦間の（黄金時代）まで長く活躍を続けた英国探偵小説界の巨匠。長篇代表作に「オシリスの眼」「キャッツアイ」「ポッターマック氏の失策」など。

